

著者に聞く

手嶋 龍一 氏 [外交ジャーナリスト]

『ウルトラ・ダラー』

新潮社 1500円(税抜き) ISBN4-10-382303-8

精巧な偽ドル札が巻き起こす、新たなテロリズムを警告する。

北朝鮮の活動の背後に潜む米中対決に焦点を当てる。

NHKの前ワシントン支局長が世に問う渾身の『フィクション』だ。(聞き手は伊藤 暢人)



経済テロの見えざる脅威

——NHK ワシントン支局長だったことで、ノンフィクションに強いという印象が広がっています。今回、フィクションを執筆した狙いは？

フィクションとノンフィクションの違いにこだわりを持っていません。この作品を書いていた2005年夏の時点で、「少し先のことを書きたい」と思い、フィクションの形を選びました。

とはいえ、会話の1つのフレーズに至るまで、裏打ちなく書いたものではありません。とすると、ノンフィクションでは各場面の情報源が特定されやすい。今回は取材源を秘匿するためにもフィクションにしました。

脱稿後に、不正取引の温床となっていたマカオの銀行と、米銀との取引が事実上停止されるなど、この小説に登場させたような出来事が起こりました。そういう意味では、いつかはフィクションからノンフィクションに分類が変わるかもしれませんね(笑)。

——物語は北朝鮮の偽ドル札問題を中心に展開していきます。

現在、北朝鮮が製造しているとされる偽札は、第3世代に入りつつあると

言われています。

第1世代は1989年にフィリピンで発見された100ドル札で、「スーパーダラー」と呼ばれました。当初は、米政府が歯牙にもかけない程度の出来栄でしたが、そのうちに精巧なものが始まるようになりまし

た。それに耐えかねた米政府は、96年に紙幣を改刷しました。様々な技術を盛り込み、当時、400億円程度の費用をかけました。ところが、数年するとこれにまで対応した第2世代の偽札が出てきた。

そして、2007年に再度紙幣を改刷せざるを得ないところまで追い込まれました。その準備のために2005年春から米政府は新紙幣のスペックを示し、それに対応する技術を持つ企業に声をかけて開発を進めています。ICタグなどで、日本企業も参加しようとしているわけです。

ところが、米政府が示したスペックなどの情報を基にして、まだ発行されていない新札に対する偽札が既に出始めている。これが第3世代の「ウルトラ・ダラー」なのです。この偽札により、経済的な混乱を引き起こすなどの新たなテロリズムも懸念されています。

ところが、米政府が示したスペックなどの情報を基にして、まだ発行されていない新札に対する偽札が既に出始めている。これが第3世代の「ウルトラ・ダラー」なのです。この偽札により、経済的な混乱を引き起こすなどの新たなテロリズムも懸念されています。



——北朝鮮問題を主題に、日、米、英、中の4カ国がしのぎを削るわけですが

ここで描きたかったのは、北朝鮮問題の背後にある米国と中国の対立です。日本

の読者の関心が高い北朝鮮の動向を入り口に、国際情勢を解き明かそうと考えました。朝鮮半島問題では米中の直接対立は起こり得ません。だが、台湾海峡を挟んだ中台間で衝突が起きれば、米中対立が顕在化します。

そこで、こうした各国の動きを冷静に解き明かす役回り、日本を舞台に活躍する英情報機関の諜報員を主人公に選びました。

——これからの活動は、

この話の続編を書くかどうかはまだ決めていません。しかし、もし書くのであれば、今度は中台関係の方に焦点を移していきたいですね。

また、将来は歴史上の巨人、つまり有名な政治家がどんな行動をしてきたかを描きたい。例えば、2001年9月11日の小泉純一郎氏、拉致事件前夜の金大中氏などに焦点を当てていきます。フィクションかノンフィクションかは、状況によって使い分けながら。

手嶋 龍一(てしまりゅういち)氏

1949年北海道生まれ。慶応義塾大学からNHKに入り、米国、ドイツで特派員や支局長を務めた。2005年6月に退社し独立、米国を拠点に活動中。